岩崎　純一　著

『岩崎純一全集』第八十一巻「芸術、文化、言語、文学（二の一）」

言語学、言語と人類、言語の起源、語族、語派

編纂、監修　岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第八十一巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、言語学、とりわけ、言語と人類、言語の起源、語族、語派に関する述作を収める。

目次

巻頭言
第一編　〇歳〜十九歳
第二編　二十歳〜二十九歳
「言語とは何か」についての私の考え方（ソシュールなどの著名な言語学者との比較を中心に）
現代日本語に関する実験
ブーバ・キキ効果 その２　「世界祖語説の真偽と、女性性器の呼称の分布について」
僕の共感覚の起源を探る１　【レゴブロックの思い出から古代日本語へ】
僕の共感覚の起源を探る２　【数詞…日本語・北方民族言語との比較】
僕の共感覚の起源を探る３　【日本祖語は元々、共感覚を表しきれた言語である可能性】
日本語についての質問
言語はなぜ家族を捨てるのか
新常用漢字
第三編　三十歳〜三十九歳
第四編　四十歳〜四十九歳
第五編　五十歳〜五十九歳
第六編　六十歳〜六十九歳
第七編　七十歳以降
第八編　著作者の一部および著作権者が岩崎純一であるもの
第九編　著作権者が岩崎純一であるもの

第二編　二十歳〜二十九歳

「言語とは何か」についての私の考え方（ソシュールなどの著名な言語学者との比較を中心に）

二〇〇五年九月五日　起筆
二〇一四年九月十八日　公開
二〇一七年三月十三日　更新
二〇一九年十月七日　更新（レイアウト乱れを修正）
二〇二〇年五月十七日　最終更新（参考文献の書式を修正）

このページでは、私自身の言語についての基本的な考え方とその学術的な根拠を大まかに書いてみます。

岩崎式言語体系に初めて触れる方向けのページでもあり、まずは言語学・言語哲学などの学問そのものの面白さを知っていただくことも兼ねて、一般によく知られたフェルディナン・ド・ソシュールなどの言語学者の学説との比較という形で書いておきたいと思います。

例文には、実際に私が聴取・目撃した言語障害者や精神疾患者の方々の日本語文を多く含んでおり、これらは私が新たな言語体系を考案する上での大きなヒントとなっています。

言葉は、人間とは別にあらかじめ存在する何かを言い当てるもの（記号）ではない。

【例】

●「コップ」・・・

もし「コップ」が「液体を漏らさずにそこにとどめることができるもの」を指す名詞ならば、飲料の入れ物だけでなく、プール、地球（海水が引力で引き止められている）、感涙・発汗・出血していない人体なども「コップ」となる。一方で、涙を流している人、運動している人、ケガ人ばかりか、倒れたコップ、割れたコップなども「コップ」ではなくなる。

←

個物や身体の向き・形状・状態が変わっただけで同一性が理解できなくなる疾患・・・統合失調症・妄想性障害・せん妄・解離性障害などの精神疾患の一部や脳卒中患者の一部

●「とべりたちるひ」・・・

統合失調症者の造語。「数百年後にこの世に現れる親友と自分との本当の友情」を意味する単語。

←

言葉が指し示す実体や概念は、存在する（した）必要もなければ、存在可能である必要もない。

【類似する学説】　ソシュールの「言葉の恣意性」（シニフィアンとシニフィエ）

シニフィアン：記号表現（意味するもの）・・・「動物」・「犬」・「木」などの字や「ドウブツ」・「イヌ」・「キ」などの音声

シニフィエ：記号内容（意味されるもの）・・・シニフィアンが指しているもの

←

「動く全てのもの」が「動物」というシニフィアンに対応するシニフィエであるならば、自動車や地球、風に揺れたり車で運搬されたりしている最中の植物も「動物」となる。

←

シニフィアンは「動物」であってもよければ、「どうぶーつ」・「○△□」などであってもよい。

←

日本語の「木」は、英語の「tree（自然植生としての木）」や「wood（木材）」を含む。各自然言語は、互いに異質な方法で世界を分節する。

←

「動物」と「animal」、「犬」と「dog」も同様。

（互いに「同じものをそれぞれの言語のシニフィアンで呼ぼう」と示し合わせたように見えるのみで、実際は世界各地で別々に同時多発的に世界を分節する中で「似通ったカテゴリ」が発見・了解されているのみである。）

シーニュ・・・一対のシニフィエとシニフィアンの恣意的関係

言葉は、世界を分節し、言葉を生み出したはずの我々自身に対し、分節された世界を同時的に認知させている。言葉どうしの違いは、人間の外界に存在するはずの実体に根拠を持たない。

【例】

●虹の色の数は異言語どうしで必ずしも一致しない。

●「蝶（チョウ）」と「蛾（ガ）」は、生物学的には違いはなく、文化的・宗教的な違いであり、特に日本においては、虫の外見についての快・不快の情、出現時期や出現場所、方言の違いなどによって使い分けられているのみである。

●「右人（みぎびと）」・「左人（ひだりびと）」・・・

妄想性障害者の造語。「右を向いている人」・「左を向いている人」の総称。たとえ家族であっても、「右人」や「左人」である瞬間は、この患者には、それが「父」や「母」と同一人物であるとは認知されない一方で、街中の「右人」・「左人」の顔が全て同じに見え、家族と他人とを区別できない（相貌失認）。

←

「家族」や「友人」とは、言葉が自己に向かって跳ね返した「有機

体・生命体の一つの分節法」の恣意的な説明であり、文脈である。すなわち、「家族」や「友人」といった親族語・人間を表す語は「ヒト」自体を指していない。ところが、「自己」自身でも毛頭ない。「家族」や「友人」とは、自己でも他のヒトでもない「他者」である。

←

ただし、ほとんどの人間は、「家族」や「友人」が具体的・個別的実体としての肉体を持ったヒトを指していると信じて生きているか、またはそう信じなければ耐えがたい。

←

「他者」への「愛憎」とは、全てが「自己自身」の「世界の了解の方法」の問題である。

←

ある特定の文法言語を獲得したことで失った「正当で自由な妄想」（例：上記の「右人」・「左人」）への憧憬を常に持ちながら文法言語の内で自己自身を懸命に生き続けることが、我々人間のとるべき態度である。

【類似する学説】 言語的相対論（サピア・ウォーフの仮説）

エドワード・サピア：「言語は思考を制約する」、「言語は思考の特性を形成する」

ベンジャミン・ウォーフ：「言語は認識に影響を与える思考の習性を我々に提供する」

←

ソシュールは、シニフィアンとシニフィエの恣意的関係のみを述べ、恣意的関係により構築された言語体系が思考の特性を生み出すことまでは述べていない。

【類似する学説】 フランツ・ボアズやクロード・レヴィ＝ストロースの「文化相対主義」

「ある文化と社会の進化度は、他の文化と社会の尺度のみによって判断することはできない。」

「文化と社会の進化や、文化間・社会間の優劣というものは存在しない。」

【類似する学説】 ベルクソンの他者論、純粋持続、エラン・ヴィタール（生の躍動）

【類似する学説】 メルロー＝ポンティの知覚論、現象学

ある言葉Xの意味は、「Xではないもの」との差異によって、必ず差別的・排他的に、ネガティブに、かつ無意識に定義される。言葉の定義は、多数の自己の欲望の暴力的妥協の絶え間なき反復である。

【例】

●「大学を卒業し、就職面接に合格して、晴れて社会人となった」

と言うとき・・・子供や学生は社会の外側にいる
「女性の社会進出」と言うとき・・・女性の多くは社会の外側にいる
「暴力団などの反社会勢力」と言うとき・・・特定団体の人間は社会の外側にいる
「この社会では色々な犯罪が起きている」と言うとき・・・全ての人間が社会の内側にいる
←
複数の「社会」の同時運用（多数の社会構成員の自己の欲望の恣意的で暴力的な妥協点）
←
これらの全てを、ほとんどの人（日本人）は即座に理解し分けることが可能であり、コミュニケーションも成立し、かつ言葉の多重規範性によってパニックをおこすなど心身に異常をきたすこともない。
←
「僕は社会人であって社会人ではないなら、いったいどうすればいいんだ。」
（発達障害男性の発言。大多数の定形発達者の言語の暴力的恣意性に対する忠実で正確な解釈は、近代の言語コミュニケーションの妨げとなる。すなわち、円滑な言語活動・コミュニケーションのためには、自己の暴力的恣意性が無意識的に実行されること、自己自身によって無視されることが要求される。）

●「犬」は「犬ではないもの」の積み重ねによって定義されるが、それは「犬であってほしいもの」と「犬であってほしくないもの」とを分ける多数の自己の欲望の妥協点である。

【類似するが不足を感じる学説】　ソシュールの「差異の体系」
「犬」は「犬ではないもの」の積み重ねによって定義され認知される。言葉の意味は、差異のモザイクにより生じる。
←
言葉の意味付けの恣意性がその言語共同体の構成員の多数の自己の欲望によって極めて暴力的に運用され妥協されていることや、そのことが同じ言語共同体内に軋轢を生む可能性があるといったことに、ソシュールは関心がなかった。
（ソシュールの関心は、あくまでも「シニフィアン・シニフィエ」、以下に述べる「連辞・連合関係」や「ラング・パロール関係」などの、言語体系の二元的構造。方言、精神疾患者のパロール、乳幼児期のパロール、言語起源論などはほぼ無視。）

言葉の意味は言葉にはない。言葉によって、言葉自身の外部に（自己と他者の中間のトポスに）定義される。

【例】

●「お前、馬鹿だな。」（友人に対して、笑いながら発言）
「わっはっは。自分でもそう思うよ。」（友人）
←
文意：「お前、おっちょこちょいだな」

「お前、馬鹿だな。」（上司が部下に対して、けなしながら）
「申し訳ございません。」（部下）
←
文意：「お前、出来が悪いな」

「お前、馬鹿だな。」（いじめっ子）
「ううん、違うよ。僕は人間だよ。」（発達障害児）
←
この発達障害児は、前出の二例のうちのどちらの文意・口調で語りかけられても、このような受け答えをする。この発達障害児は、これ以前に「バカはウマ（馬）・シカ（鹿）と書くんだよ」と親（または他の大人）から教えられており、かつこの言葉が「知能のはたらきが鈍い人の形容」であることまでは理解できず、ウマとシカそのものであると理解した。

「馬鹿」の由来・・・僧侶の隠語である「莫迦（バカ）」の当て字。ウマとシカ程度の知能。元来の「莫迦」も「知能のはたらきが鈍いこと。また、そのような人」を指し、同義。

←
この発達障害児は「馬鹿」という言葉で傷つくことがない。（「馬鹿」という言葉でこの発達障害児の喜怒哀楽を揺さぶることはできない。）
←
人を傷つける（喜ばせる）のは言葉ではない。（自己を傷つけ、喜ばせるのは、自己自身が生み出した言葉の解釈である。）
←
前者の二例のコミュニケーションが成立するためには、「馬鹿」がそれ自体として語意を持つ記号ではなく、前後の連辞的文脈によって語意とその機能が決定され、或る特定の共時態としての「特定の人間関係」を生起させるための契機（感情誘発のトリガー）にとどまらなければならない。
←
最後の一例については、以下に述べる連辞と連合とが未分化である自己の保持者が存在することを示している。
←
しかし、言葉がなければ、あらゆる喜怒哀楽は未分化・未分節のまま、世界につかみどころなく遍在するのみである。

【類似するが不足を感じる学説】 ソシュールの「言語非実質論」における「連辞・連合関係」

「ある語が他の語と接触する様式は二つある。」
連辞・・・シニフィアンとシニフィエが直喩的関係である語や文の連なり。統合関係。
連合・・・シニフィアンとシニフィエが隠喩的関係である語や文の連なり。範列関係。
←
「キが立っている。」は、「ここは公園だ。キが立っている。」といった前後の文脈の参照によって初めて「気が立っている」ではなく「木が立っている」という文意に解される。すなわち、当該文と前後の文・文脈の全てがシニフィアン、「木が立っている」がシニフィエであり、「木」はその他の語と統合関係にある。（連辞）
←
「この公園に何本も植えられているキ」の「キ」は、「木」であることが疑いようがない。すなわち、「この公園に何本も植えられている」がシニフィアンであり、「木」がシニフィエである。また、この「木」は、「花」などに入れ替えることができる。すなわち、「木」は「花」と範列関係にある。（連合）
←
岩崎式言語体系の考え方・・・
「ただし、ソシュールは連辞・連合の二元論にこだわったため、このままでは印欧語の定形発達者のパロールにしか適用できず、現在の発達障害者・学習障害者などの文法ミスを説明できない。」

言語の構造とは、文法・統語法（シンタックス）そのもののことである。ある言語のシンタックスが記述できない差異の体系は認知することができない（胎児・乳児・幼児期にしか認知していない未分節領域がある）。

【例】
●ある会社の重役の発言：「女性のバラエティに富んだセンスがアクティブに、クリエイティブに社会にコミットできるストラテジーをビルドするための我が社のコンセンサス、コンプライアンスをやっていくプランというわけです。」
←
多くの単語が英単語であるが、やはりこれは日本語文である。
●「私は、です、学生、であるところの、先日、ばかり、した、帰国。」
←
全ての単語が日本語であるが、統語法的には欧州語文である。
●日本の大学の学部・学科名：「カルチュラルスタディーズコース」・「クリエイティブライティングコース」・「エンターテインメントビジネスコース」など
←

多くが英単語の日本語解釈による造語や和製英語であり、そのままでは英語圏で通用しないが、その原因は統語法ないし語の形態にあり、「カルチュラル」や「クリエイティブ」といった単語にはない。

●「空をうつくらせない」・「ボクはママをさびしらせない」・・・幼児の言葉。「（何かが）空を美しくさせない」・「ボクはママを寂しくさせない」の意味に近いと考えられるが、「うつくらす」・「さびしらす」の意味内容を、日本語を含む既存の自然言語は正確に記述できない。

【類似する学説】 言語的相対論（サピア・ウォーフの仮説）、ジャン・ピアジェの「思考発達段階説」

言語的相対論については先述。

【類似する学説】 ソシュールの「ラング」・「パロール」・「ランガージュ」

ラング・・・ある言語共同体における社会的規範体系としての言語の性質（標準日本語・東京方言の文法や、「この品詞の次にはこの品詞は続かない」という暗黙の了解の体系など）

パロール・・・個人の言語行為。ラングの個人における実践（特定個人のみの文法・語彙など。広義には、地方方言の文法・語彙などを含む。）

ランガージュ・・・ラングに基づいて行われる言語活動と、それによる世界の分節化能力

【疑義を覚える学説】 チョムスキーの「言語生得説」・「生成文法」

チョムスキー：「のちにいかなる個別の自然言語にも遷移しうるだけの十分な豊かさを持った、語族・語派の違いによらない、乳幼児に生得的な初期状態である UG（普遍文法）は、合理的に特定可能である。」

←

岩崎式言語体系の考え方・・・

「すでに個別の自然言語の一派である印欧語の統語規則によって形而上学的言語学の系譜上に形成された（チョムスキーの）自己が思案し形式化しうる UG は、その自己を規定する印欧語の変遷史にしか適用できない。すなわち、言語学的な思考・思惟とはすでに近代印欧語的行為である。例えば、我々がアメリカ原住民の思考過程を知るためには、良きにつけ悪しきにつけ、印欧比較言語学への批判精神や自己の擬似喪失体験（言語障害や精神疾患）を経なければならない。」

【対立する学説】 イェスペルセンの「英語孤立語化説」

イェスペルセン：「英語は、活用を失ったことでいずれ中国語のような孤立語となる。」

←

岩崎式言語体系の考え方・・・

「英語は今後、孤立語化することは考えられない。活用を失って見かけ上は孤立語化した英語は、統語規則の自由度がより奪われた超理想的屈折語である。その証拠に、自動詞と他動詞の区別は、中国語ではとりわけ複合動詞において消失する場合が多々見られるが、英語ではほとんど見られない。」

一度習得した母語（言語共同体として用いるラング）は、個人の言語行為のうち、文法（統語法）を厳しく束縛していながら、それ以外の側面については放任する。シンタックスの獲得過程は、個人の思考の発達過程である。

【例】

●統合失調症者の文章：「心から記憶の近くを愛している紫色のゆくえが、私の右向きの悲しみをひどく未来に締め付ける」

●解離性同一性障害者の文章：「私の私が私の中の友達に約束する」

●社交不安障害者の文章：「そんなことはない考えが緊張の赤面をくぐる恥ずかしさ」

←

いずれも文法・統語法・連辞の上では非の打ち所のない日本語文。連合関係が定型のラングとはかけ離れているだけである。

←

この統合失調症者は、「自己」と「他人」との区別があまりつかず、この区別をつける訓練をおこなっている。すなわち、ラングの文法の束縛性は、自己の存在を必要としないまま、当人（の脳）の中で強く保たれる。一度確立したラングは、人間の自己を離れて独立独歩し、それ自体が一つの「意志」として人間の仮想の自己をさえ束縛する。

←

この解離性同一性障害者の中には、複数の「自己」が存在する。すなわち、ラングの文法の束縛性は、自己の複数化に合わせてコピーされ、複数の自己間で共有される。ラングに追いかけられず束縛されない自己は存在しない。

【類似する学説】 レイ・ジャッケンドフの「概念意味論」、ジャン・ピアジェの「思考発達段階説」、井筒俊彦の「言語アラヤ識」、龍樹（ナーガールジュナ）の中観思想、唯識論

【多少疑義を覚える学説】 チョムスキーの「言語生得説」・「生成文法」

【対立する学説】 ソシュール、印欧比較言語学、デカルトの動物機械論、優生学、社会進化論、弁証法的唯物論、目的論的進化論、行動主義心理学、英語帝国主義

ソシュール：「言語の起源などというものは存在しない」、「言語の発生に根拠はない」

←

言語の起源や獲得過程（自然言語の発生起源や乳幼児の母語獲得過程など）の存在を信じることはなく、その探究に無関心。あくまでも「根拠なくすでに在るラングこそが言語である」として、言語学の対称をほぼラングに限った。

言葉のイデアは存在しない。

【例】

●「善人」・「美人」・・・

人間の認知不可能な理想的・超越的異世界（神のみが創造・統制・参照できるイデア）に何らかの形で善人・美人（または、神がそれらの定義を記述した仮想辞書）が存在して、それがために「善人」・「美人」という言葉が生まれたのではない。

●同様に、先述の「コップ」のように、理想的な機能・形状・大きさなどを持った実体・個物のイデアも存在しない。

●「英語では動物を animal と言う。」という言明は、シニフィエの根拠にイデアを前提とし、イデアを媒介した言明であることから、誤りである。

【類似する学説】 ソシュールやヤコブソン以来の構造主義言語学、実存哲学、実存主義、ニーチェ哲学、「生の哲学」、反哲学、文化心理学、直観主義、多値論理、ファジィ論理、ソクラテス以前のギリシア自然哲学

【対立する学説】 プラトニズム、アリストテレスの唯名論、ヘーゲル哲学、形而上学至上主義、侮蔑的ペイガニズム、印欧比較言語学至上主義、科学的実在論

プラトン：「イデアが存在し、それが個物や個物の集合、概念に取り付いているがために、名前（名詞など）を付けることができる」、「人間はイデアを認識できない」（実在論的）

アリストテレス：「個物や個物の集合、概念が存在し、それに名前（名詞など）が付いている」（唯名論的）

←

「我々が何かに名前を付けたり何かを考えたりすることができるのは、個物か概念かを問わず、それが元よりどこかに存在しているからだ」と考えた。

←

「人間が認知し得ない理想的・絶対的世界の実在」という考え方は、「イデア」や「純粋形相」と呼ばれ、のちに一神教（とりわけキリスト教）と親和して「God」と呼ばれる。

文化・宗教・習俗の発祥や精神疾患の出現の仕方は、ラングとしての母国語の統語法がランガージュ（言語活動）によって我々の自己自身に跳ね返した文脈（世界の分節の方法）の制約を受ける。

【例】

●文化依存症候群（文化結合症候群）の存在：日本の対人恐怖症、朝鮮半島の火病、マレーシアのアモック、東南アジアや中東のラタ、東洋の腎虚など

←

これらは、医学的・生物学的現象としての症状に対する呼称ではなく、各自然言語（ラング）の語やシンタックスで分節化・記述・言明された世界がパロールを操る自己に向かって跳ね返った結果として起きた言語文化的症状である。（言語文化としての精神疾患）

●日本の鯨食文化に対する批判と捕鯨活動に対する動物愛護団体からの暴力的妨害

←

日本語の文脈における日本人の脳には、鯨が特別に優先的に保護すべき哺乳類とは認識されていない。（農耕文化・海洋文化と家畜・放牧文化との違いは、それぞれの言語文化と一体である。）

←

鯨食のみならず、馬食・牛食・羊食などについても同様のことが言える。

●大逆罪・尊属殺人罪の旧規定、定型発達者と発達障害者・知的障害者との区別など：

←

天皇・君主・政府要人・親族・定型発達者の生命（身体の作り）・人権・人格（神格）などは、それら自体が尊ばれるべきものとして生物学的イデア界によって定められ、言語に先立ってその崇高さが存在し、我々の眼前に認知されているのか（一神教的な神にとって生得的に最も喜ばしく優秀な有機体の分子構造は存在するか）、それとも、我々の言語行為（ラング、法の条文、共同体の方言、口承など）が世界を分節化して生み出した文化・習俗・宗教観の積み重ねの賜物こそが社会制度であるのか。後者であると言わざるを得ない。（後者の徹底的肯定が「他者」への真の崇敬の念である。）

【類似の学説】 クロード・レヴィ＝ストロース、ラドクリフ＝ブラウン、文化人類学、構造機能主義、構造主義社会学、文化心理学、文化精神医学、アニミズム、トーテミズム、最新の DSM（アメリカ精神医学会による）

DSM-IV-TR、DSM-5 の言語的相対論的態度：「精神疾患は定義できない」、「例えば、統合失調症者が存在するのではない。統合失調症の診断基準に該当する者が存在するのみである」

【対立する学説】　印欧比較言語学、操作主義的精神病理学、バージョン III～IV までの DSM

【参考文献】

木田元　『反哲学入門』　新潮社、二〇〇七
児玉徳美　『言語理論と言語論―ことばに埋め込まれているもの』　くろしお出版、1998
中島平三・外池滋生　『言語学への招待』　大修館書店、1994
原口庄輔・中村捷 編集　『チョムスキー理論辞典』　研究社出版、1992
丸山圭三郎　『ソシュールの思想』　岩波書店、1981
ラドクリフ＝ブラウン　『未開社会における構造と機能』　青柳まちこ 訳、蒲生正男 解説、新泉社、2002
ハイデガー　『存在と時間』（上・下）　細谷貞雄 訳、ちくま学芸文庫、一九九四
ジャン・ピアジェ　『構造主義』　滝沢武久・佐々木明 訳、白水社〈文庫クセジュ〉、1970
フェルディナン・ド・ソシュール　『一般言語学講義』　小林英夫 訳、岩波書店、1972
B・L・ウォーフ　『言語、思考、現実』　池上嘉彦 訳、弘文堂、1978
『EBM 精神疾患の治療〈2006 - 2007〉』　上島国利、三村將、中込和幸、平島奈津子、中外医学社、2006
『DSM-IV-TR　精神疾患の分類と診断の手引（新訂版）』　原著：American Psychiatric Association　訳：高橋三郎、大野裕、染矢俊幸　医学書院　2003 年 8 月
『DSM-5　精神疾患の診断・統計マニュアル』　原著：American Psychiatric Association　日本語版用語監修：日本精神神経学会　監訳：高橋三郎、大野裕　訳：染矢俊幸、神庭重信、尾崎紀夫、三村將、村井俊哉　医学書院　2014 年 6 月
『ICD-10　精神および行動の障害　臨床記述と診断ガイドライン（新訂版）』　原著：World Health Organization　監訳：融道男、中根允文、小見山実、岡崎祐士、大久保善朗　医学書院　2005 年 11 月
"Language, Thought, and Reality", 2ND：Selected Writings of Benjamin Lee Whorf, Carroll, John B. (EDT), Levinson, Stephen C. (EDT), MIT PR 2012
American Psychiatric Association (2000). Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders (4th ed., text revision). Washington, DC: American Psychiatric Publishing.
American Psychiatric Association (2013). Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders (5th ed.). Arlington, VA: American Psychiatric Publishing.
"International Statistical Classification of Diseases and Related

Health Problems 10th Revision (ICD-10) Version for 2010 (Online Version)". Apps.who.int. Retrieved on 2013-04-16.
WHO (2010) ICD-10: Clinical descriptions and diagnostic guidelines: Disorders of adult personality and behavior
"Intellectual developmental disorders: towards a new name, definition and framework for "mental retardation/intellectual disability" in ICD-11". World Psychiatry 3 (10): 175-180. October 2011.
精神科病院入院患者の状況　国立研究開発法人　国立精神・神経医療研究センター（NCNP）
精神疾患: メルクマニュアル１８版　日本語版
医学用語集めでぃっく

現代日本語に関する実験

二〇〇五年九月五日　起筆
二〇一四年九月十八日　公開
二〇一七年三月十三日　最終更新

これらは私が考案・主催している実験ですが、私自身は普段仕事で会議などがあり、標準現代日本語を話す必要があるため、実験にあまり参加することができません。現在のところ、ほとんどの場合、新人間学研究会や岩崎式日本語研究会のメンバー様（特に無職の方々）が実践して下さっています。

【注意】　これらの実験は、言語学的観点から考案者・参加者自身の意志によって行われているものです。母語の獲得過程の途上にいる子供や精神疾患者・知的障害者の方々に対する参加の強制などは絶対に行わないで下さい。

その他、以下の関連する注意事項も合わせてご覧下さい。

●岩崎式日本語に触れていただく際の注意点
●岩崎式日本語の使用者の方々向けの注記
●精神病理学・精神疾患研究内の各注意事項
●ご訪問者の方々向けのご留意事項

【ルール（統語論・形態論に関する実験）】
一日間、用言の終止形を用いて発話してはならない。（日常生活の中で自然に検証するため、無言の時間もカウントする。）

結果

全員が一分以内～三時間で脱落。

・・・多くの場合、誤って「もう夏が終わるって気がする」などと終止形を用いたことに気づき、脱落。残った人も、ルールに留意しながら発話すれば技術的に終止形を避けることは可能であった

が、心理的に極めて大きな負担・重圧がかかり、途中で挫折。

【ルール（統語論・形態論に関する実験）】

一日間、用言の命令形を用いて発話してはならない。（日常生活の中で自然に検証するため、無言の時間もカウントする。）

結果

全員が一分以内～七時間で脱落。

・・・多くの場合、誤って「これを頑張れってこと？」などと命令形を用いたことに気づき、脱落。残った人も、ルールに留意しながら発話すれば技術的に命令形を避けることは可能であったが、心理的に極めて大きな負担・重圧がかかり、途中で挫折。

・・・直前の実験と合わせて分かることは、我々は命令形よりは終止形を多く用いて生活しているが、命令形でさえ「使わないように留意する」ことは極めて苦痛であり、このルールの元での生活・コミュニケーションは不可能であるということである。

【ルール（文字体系・社会学・文化的アイデンティティに関する実験）】

一日間、一般にカタカナで書く単語を用いて発話してはならない。（「やかん」などの国語化した外来語は使用可。日常生活の中で自然に検証するため、無言の時間もカウントする。）

結果

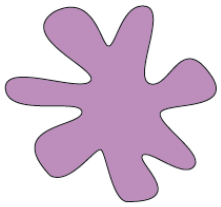
全員が一分以内～二十時間で脱落。

・・・これは、テレビのバラエティ番組などでも遊びとして行われているようである。

・・・結果として、個人差が大きく出た。日常でいわゆるカタカナ語や流行語（英語などの外国語、外来語、「スマホ」などの和製外国語、「ケータイ」などのカタカナ書きした国語など）を使い慣れている人ほど、このルールを守り切れなかった。

ブーバ・キキ効果 その２　「世界祖語説の真偽と、女性性器の呼称の分布について」

二〇〇七年十一月二十六日　起筆、擱筆、公開



●「ブーバ・キキ効果」について、色々と質問を頂いています。ほとんどの質問には、十月十六日の返答で網羅できると思うので、ご覧下さい。

http://ij-art-music.sblo.jp/article/5933567.html

●さて、ある女性の方（共感覚は持っていないと自覚していらっしゃるようだ）から頂いたメールに、興味深いことが書いてあった。それは次のようなもの。

犬の鳴き声は、日本語では「ワンワン」で、英語では「バウワウ」だけれども、極端に違和感があるほどの違いではなく、むしろ「w」音などは共通しており、決して「ニャーニャー」や「ユラユラ」や「モヤモヤ」ではない。桜は、確かに私たちにとっては美しいけれども、かと言って、フランス人にとってはグロテスクに見えるかと言うと、そうでもない。その点に、純一さんがいつも強調している「日本固有の精神性や民族性・文化観」を超えた、人類共通の何かを私は感じるのだけれど、それを純一さんはどう思うか。もしかしたら、私の言っていることは、極めて純日本的な共感覚を持って生きている純一さんにとって、暴力的なものなのでしょうか。私は、ブーバ・キキ効果は、ほぼ全面的に信じているけれど、日本人男性の立場から、これに反証を加えるような発想が、もし純一さんの中にあったら、何でもいいので教えて下さい。というもの（要約）。

そこで、僕はこのメールにどのように答えたかと言うと、

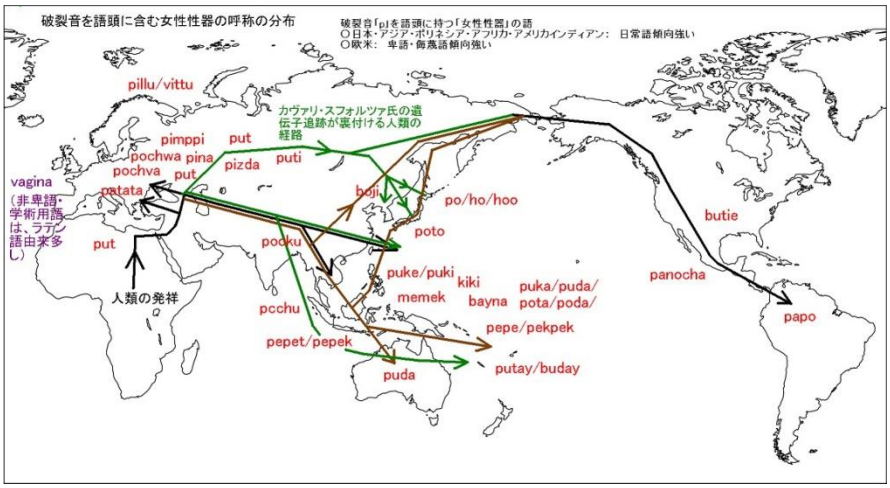
「ワンワン」と「バウワウ」は、確かに似ているけれども、それは、物理法則そのものが地球上のいたるところで大きく違うことはない、ということだけで説明が付くものではないか。例えば、地球上のどこかで、物が上に向かって落ちる、という物理法則が成り立つ地域があったら、そこに住む共同体の人々は、「ポトン」ではなく、「フワッ」というような擬音語を思い浮かべるでしょう。ところが、そういうことは、現在のところありません。だから、「ワンワン」と「バウワウ」が、大きくは違わない、少しは似ている、という我々の（あ

なたの）感覚が、日本民族の血と遺伝子の固有性を疑う論拠にはならないと思います。それに、僕が共感覚研究をする上で、最終的に辿り着きたいのは、東洋と西洋、日本と大陸との差異の強調にとどまらず、「結局、人間という生き物は、個人である」というところなのです。ただし、「ワンワン」と「バウワウ」とに共通性を感じるその感性自体は、例えば人間が（あなたが）外国文学に感動したり、外国の音楽や絵画に感動したりすることに役立つでしょう。「ワンワン」という鳴き声の可愛らしさが、異文化の人々には「ガオー」という恐怖の叫び声に聞こえることはないのだから。

と答えておいた。で、最後に、「これに関連して僕が研究していることがあって、後日、その世界祖語と女性性器の呼称について、文章を書くので、ご覧下さい。」と書いておいたので、今日はそれを書くわけである。

この方の言っていることは、実はとても重要なことだと思う。そこには、ひょっとして、「個々人の遺伝子や、民族固有の文化を超越した、人類に普遍的な知覚形態は、やはりかつて存在したのではないか、ゆえに、人口がずっと少なかった頃には、たった一つの言語をしゃべっていた時期が、我々人類にはあるのではないか」という、ある意味、夢のような仮説も立てられるからだ。要するに、「世界祖語」の話だ。

（http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E8%AA%9E%E6%97%8F←この記事の、「世界祖語」を参照。）



●ここ一年くらい、この「ブーバ・キキ効果」について考えているが、僕の場合は、自分が共感覚者であり、自分が研究対象であるので、自分の中からどういう発想が出てくるかということが、自分で楽しみでもある。僕が共感覚者当人として、常にこれだけははずせないだろうと思うに至ったことは、「”ブーバ・キキ効果は人類に普遍的なものか”を問うことは、”世界祖語は存在するか”を問うことに等しいはずである。」というものだ。（そして、世界祖語は存在しないだろう、というのが、僕の実際の研究と僕自身の共感覚体験の両方から感じる、今現在の結論なのだが、まだまだ考えることが多くて、揺らいでいる。）

男性作家と女性作家の使う単語、あるいは男性と女性が普段話し言葉で使う単語の統計を取ってみると、圧倒的にオノマトペ（フワフワだとか、ワンワンといった擬声語・擬態語）を多用するのは女性のほうであるという結果が、どの文化圏・言語圏においても出るそうだが、少なくともこれが、多くの女性共感覚者の豊かな感性の維持に役立っているだろうと思うと、それはそれで男性共感覚者である僕から見ても、うらやましいとさえ思う。

と、それは余談だけれど、そもそもオノマトペは、言語の発祥というものと深く関わっているのであり、例えば、ニワトリの鳴き声は、日本語と英語とでは、「コケコッコー」と「コッカドゥードゥルドゥー」という違いがあるものの、決してどちらの言語でも「ガオー」や「パオーン」や「サラサラ」などという音声を用いるわけではない。むしろ、「k」音を用いるなど、「どこかしら似ていると言えなくもない」のは、なぜかと考えることも、また面白い。これは、先の女性のメールの話と、同じことである。

一時期は、言語学の世界でも、日本語の「名前（namae）」とドイツ語の「name（ナーメ）」が、よく似ているから同一起源ではないか、ゆえに、日本人とドイツ人は同一民族に起源を持つのではないか、といった（ちょっと行き過ぎな、政治的イデオロギーに関わるような）ことが本当に研究されていたし、それも一概に馬鹿にはできないものだったから、なかなか難しい。

実は、この「ブーバ・キキ問題」を考えていく上で、僕は例として「女性性器の呼称」を見るべきだと思い、世界中で「女性性器」を示す単語にどういう音声が当てはめられているかを徹底的に洗い出してみたことがある。なぜそう思ったかと言えば、以下のような理由による。

一切の文明語・文化語を排除し、民族・国家・共同体・文化の差異を超えて、最後に残る普遍的なものは何かを考えてみれば分かると思う。要するに、極端なことを言えば、「携帯電話（ケイタイデンワ）」という単語の音を聞いて、世界中の人々があの電話の形を想像する

かと考えることに、意味がないことくらいは、今の日本人にもすぐに分かる。と、これは極端な例だが、他にも例えば、「木（き）」「舟（ふね）」という音声の起源を遡ることには意味があるけれども、「木材（もくざい）」「船舶（せんぱく）」の起源を探っても、世界祖語には何の関係もない、という意味だ。江戸時代の日本人に向かって、「mokuzai」だの「senpaku」だのと言っても、何のことやらである。そういう不要な単語の淘汰作業をどんどん進めて、時代を遡っていくと、日本語では、やがて「ヤマ（山）」「ハタケ（畑）」といった単語が残る時代がある。ただし、これさえにおいても、和辻哲郎の「風土」の話を持ち出すまでもないが、「山」一つにしても、日本の富士山と、欧米のアルプス山脈やロッキー山脈の山々を見比べれば、いかに様子が違うかが分かる。生えている植物も全く違う。その違いから、「ヤマ」と「mountain」の違いが生まれたわけだ。だから、こういう「人体を離れた自然物の呼称」を辿っても、「ブーバ・キキ効果」は見えてこないし、民族間・文化間の違いが、むしろ明確になってしまう。ところが、その違いさえも遡ったところに何が残るかと考えれば、それは、民族を超えて普遍的と言えるものを指し示す単語であるべきだということになる。ゆえに、その中には、「女性性器」を意味する単語が必ず含まれているはずであり、「女性性器」を意味する単語は、最も古い起源を持つ単語の一つと考えられるだろう。「女性性器」という単語は、民族差が最小にして男女差が最大であって、かつ脳の進化過程で見ても最も変化のない根源的欲求と結び付いている、唯一の単語だとも言える。

つまり、「ブーバ・キキ効果は、あらゆる場合において普遍性を持つか」との問いの答えを求めようと思ったら、おそらくは「性と体の部位に関する単語を追っていく」のが、一番信憑性の高い方法だと思えてしまう。おそらく、これは何も、共感覚を持つ僕だけでなく、言語学者一般の認識ではなかろうかと思う。

そして、そこまで考えてもなお、結局のところ、「民族・言語・文化・風土の唯一の起源など、存在しない。フランスとスペインとイタリアの起源はラテン語であるが、言えるのはそこまでであって、日本は日本であり、漢民族は漢民族であり、朝鮮民族は朝鮮民族である。」というのが、僕の行き着く結論なのだが、こういう発想は、人間の遺伝子だけを調べて見ても分からないが、ぼーっと「日本書記」や「源氏物語」を読んだり、僕自身の共感覚をノートに書きとめていたら、急にひらめいたようなこともあって、不思議なものである。

「世界祖語は存在する」という説は、案外、科学の発展の恩恵をこうむっているかもしれない。白人だろうが黒人だろうが、現生人類の全てが、ネアンデルタール人とは遺伝的に無関係であることが証明された今、いわゆる「ミトコンドリア・イヴ」を追求すること、つまり、日本人も欧米人もアフリカ人も元は一つである、ゆえに、しゃべっていた言語も一つであったに違いない、という仮説が、再

び馬鹿にできないものになってきたのは確かだからだ。

僕は僕で、この僕自身の共感覚が、なぜここまで上古日本人的な様相を呈しているのかを、自分の生い立ちという個人レベルでも、自分が日本人男性であるという民族レベルでも、探究しているわけだが、結局のところ、行き着くところは、「たった一つに集約されるような言語や民族や共同体、東洋人と西洋人の別や白人と黒人の別さえも無くしてしまうようなたった一つの民族的・文化的起源というものは、存在しなかっただろう。」ということになりそうだ。そういうことを、「女性性器」の呼称を世界地図に描きこんでいく中で思った。

日本語で「女性性器」は「ぽと(poto)」「ふぉと(φoto)」「ほと(hoto)」である。「φ（ファイ）」は、下唇を噛まない「f」の音で、日本人の「ファ行子音」である。（なお、日本各地の方言によっても、様々な言い方があるが、その違いは省略する。）

南太平洋の島々の言語、いわゆるオーストロネシア語族と呼ばれる言語を話す民族が、女性性器をどう呼んでいるかを見ていくと、極めて日本語に近いので、驚く。「pota」「poda」「boto」「puke」「puki」「kiki」「puka」「puta」「pepe」「pepek」「pepet」「pekpek」「buday」「pooku」「peti」「putay」「potoy」など、全て「女性性器」の意味である。そうなると、フィジーやトンガの人々と、我々日本人との間には、遺伝的に見ても、（朝鮮人や中国人よりも近いと言えるほどの）つながりがあるのではないかという突拍子もない発想が、実は史実なのではないかという思いがしてくる。（ちなみに、タガログ語（フィリピン語）では、女性性器は「puke」だが、多くのアジア諸国と同様、フィリピンは英語ができなければ、ほとんど生きていけないような国であり、女性性器に対しても、この固有語を捨てて「vagina」を用いている。これは、残念なことである、と僕は思う。もっとも、今の日本の若者に、「女性性器を何と言う?」と尋ねたら、ほぼ 100%は「vagina」と答えるだろうし、日本語で言っても「女陰」となるに違いない。だから、「ほと」は死語であると言ってよいと思う。要は、日本人も他国の言語に口出しできないほどの現状だ・・・。）

ただし、一つだけ注目したいのは、「p」の音を「h」の音に変化させてきた民族は、僕が知る限り、原始大和民族と渡来人の混血以降の日本人の特徴である。縄文期の日本人・アイヌ民族・琉球民族はそうではない。朝鮮民族になると、一切変化がない。（朝鮮語では、星は「ピョール」だが、日本語と同じ変化をすれば、「フョール」→「ヒョール」と変化すべきだったことになるが、現代朝鮮語でも、星は「ピョール」のままである。朝鮮語では、濁音・半濁音の概念がないことを考慮しても、なお、そうである。）　つまり、「p」を「h」に変化させる日本人の感性は、世界規模で見れば、ちょっと風変わ

りすぎる事態であるようだ。

少なくとも渡来人流入以降のいわゆる「日本人」以降、つまり、縄文人やアイヌ人や琉球民族と、渡来人との混血が進んだと思われる、その時期以降は、なぜか「p」をことごとく「h」の音で発音する。「ぽし」（星）は「ほし」になり、「へそ」（臍）に至っては、「ぽぞ」が「ふぉぞ」になり、「ほぞ」になって、「へそ」になったのだが、「ほぞ」でさえ、「ほぞを噛む」という諺に残っている程度、というように。

しかも、日本語の発音が、現代とほぼ同じに確定されたのは、まさに日本が2世紀に渡って鎖国体制をやったときであるから、なおのこと、「p」（唇をいったん閉じてから破裂させる子音）を面倒に感じて、「h」（力を入れなくても発音できる子音）に変化させる傾向は、他のアジア人と原日本人にはなくて混血日本人のみにある何か、混血以降の日本民族の血と遺伝子のみが持ち続けた「音声観」と考えざるを得ない。（僕は作曲をしていることもあり、「どうして日本人の知覚と思考からは、ピアノやドミソの和音が生まれず、三味線や琴といった楽器とその音階しか生まれなかったか。ところが、明治以降は、なぜ日本人はドミソを協和音と感じる聴覚を持つようになったか。」をある程度説明できると思っているが、長くなるので、今は割愛。）　とにかく、「民族の本性は、鎖国をやってみれば分かる」というのは、どうやら本当であるようだ。

従って、女性性器の呼称の起源を考えるには、すでに大陸との交流を持ち始めて以降の歴史書である日本書紀に出てくる女性性器の記述さえも遡って、それよりも前の日本人、あるいは日本人男性が女性性器を目視して、今後この「女性の体の部位」をどんな音声で呼んでいくべきかと感じていたかを見なければならない。日本書紀では、女性が「ほと」に火傷をして、糞尿から多くの神が生まれ・・・といったことが書いてあって、まあ、それがイザナミ神で、うんぬんということになるのだが、それはともかく、要するに、その頃の我々日本人・日本人男性は、女性性器の形状を目視したときに、「ぽと」ないし「ふぉと」という音声を発想していた。

つまり、使っていた語彙自体は、南太平洋の島々の人々と共通していたのに、日本だけは、文字を中国から借りてきた。だから、ある意味では、日本と朝鮮・中国との間には、「ブーバ・キキ効果」の普遍性は、成立しないとさえ、言えてしまうであろう。日本人の知覚と「ブーバ・キキ効果」関係にあるのは、むしろ南太平洋の人々の知覚であることになる。（日本語と、中国語や朝鮮語とが親類関係にないのは、今は常識のようになっている。ちなみに、日本語の文法は、モンゴル語・トルコ語・フィンランド語・ハンガリー語と共通しているが、南太平洋のオーストロネシア語族とは異なっているから、余計に話がややこしいのだ。）　いずれにしても、日本語の語彙だけは、日本海よりも太平洋のほうを簡単に飛び越えてきたのでは

ないか。

ちなみに、僕自身は、女性性器を示す「ほと」の語源は、次のような語と関係があると思ってきた。「ほ」は、「体の真ん中にあって、へっこんで穴になっているところ」の意味であり、「ほぞ（へそ）」「はな」などの部位が、同様に「は行音」であるのも、納得してはいるが、いまだ謎である。「ほ」を「ふぉ」・「ぽ」と発音していたことを考えると、この「ふぉ」・「ぽ」が「液体・水分の流れ出るところ」を意味したのではないかという考えがあったため。

「ほとばしる」（迸る）勢いよく飛び散る。また、激しく流れ出る。噴き出る。
「ほとびる」（潤びる）水けを含んでふくれる。ふやける。
「ほとばかす」（潤ばかす）水に物をひたしふやかす。ほとばす。
「ほとぼる」「ほとおる」（熱る）熱を発する。熱くなる。
「ほとりばむ」（辺りばむ）端近くである。浅はかである。
「ほとめく」ほとほとと音を立てる。
「ほとき」「ほとぎ」（缶）昔、水などを入れた瓦製の器。胴が太く口が小さい。
「ほとけ」（仏）
「ほととぎす」
「ほとほと」困り果てた、また、うんざりした気持ちを表す語。まったく。つくづく。ほとんど。すんでのことで。あやうく。
「ぽとぽと」「ぼとぼと」液体が続けざまに落ちる音や、そのさまを表す語。
「ぽとり」「ぽとん」「ぽと」「ぽっとん」しずく、または小さな物が落ちる音や、そのさまを表す語。
「ふところ」（懐）　ぷと→ぷところ（ぷと）→ふところ
「ふくろ」（袋）
「ふた」（蓋）
「ふた」（二・双）
「ふたぐ」（塞ぐ）　ぷと→ぷたぐ→ふたぐ
「ふたたび」（再び）同じ動作や状態を繰り返すこと。
「ほたる」（蛍）
「ほたえる」戯れる。甘える。
「ほたほた」機嫌よくうれしそうなさま。しずくや花などが続いて落ちるさま。
「ぽっぽ」湯気・炎・煙などが盛んにたちのぼるさま。からだが熱くなるさま。

「ぽとり」などは、出産のときの音を考えてみたが、どう考えても、子どもを産み落とす様子というのは、ここまで軽い音で表現できるものではないだろう。となると、この語と女性性器「ほと」の語との間に、何らかの関係があるとすれば、やはり月経に関する擬音語として、ということになるだろう。それにしても、出産よりも、月経なり性行動に関する音を連想させる単語ばかりに「ほと」「ぽと」

の語が異常に多いのは、僕の類推が正しいとすれば、それは男性が作った言葉だからである。なぜなら、そもそも自分の「ほと」を正面から普通の体勢で見るという行動は、女性にとっては、唯一自分にだけ不可能なことであり、一方で、第一に「ほと」を見るのは男性であるから、という事情によるだろう。自分にだけ不可能で、他人にだけ可能であるという点が、女性性器「ほと」と、他の基礎語彙（「やま」や「こめ」や「みず」）との、決定的な違いであろう。

ちなみに、ヨーロッパの言語では、女性性器を意味する単語は、ほとんど「v」で始まる（「v」の発音は、言語によって異なる場合があるが、ほとんど全て下唇を噛む子音である）。「vagina」（英・ドイツ・オランダ・イタリア・スペイン・ポルトガル・ノルウェー・カタルーニャなど）、「vagin」（フランス・ルーマニア）などである。ポーランドの「pochwa」、チェコの「pochva」、スウェーデンの「slida」、デンマークの「skede」など、興味深い音もあるが、ともかく、ヨーロッパでは「女性性器」がほとんど「v・g・n共同体」であるのは、結局のところ、キリスト教とラテン語とローマ帝国の力によるものである。しかも、欧米では、「p」やそれに近い子音で始まる「女性性器」の呼称は、ほとんどが卑語か、第二義的に使われる単語だ。「pussy」「poontang」「patata」「pina」「boba」「papo」「pucha」「pillu」「vittu」「putz」「topa」「fitte」「pizda」「fitta」「pulla」などだ。

ところで、世界祖語説を本当に唱えた（唱えてしまった！？）言語学者のリューレン氏は、驚くなかれ、「水」や「山」といった各種単語の祖語を推測しており、なんと「女性性器」の祖語を「put～」であると推測しているらしい。これは、ヤマトコトバの女性性器「ぽと（poto）」とよく一致しており、驚きではあるが、ここまで来ると、やはりある種の猜疑心がはたらくもので、「それは偶然の一致だろう。」と反論したくなるのはなぜだろうかと苦笑する。結局のところ、リューレン氏が言っていることは、「vagina」（英語）だろうが「ematin」（フィンランド語）だろうが「ぽと」（日本語）だろうが、世界中の女性性器の呼称が、「put～」に集約されると言っているのと同じことである。本当にそんなことがあるのか。

僕としては、もし数千年前の大和民族とヨーロッパ人が互いに出会ったら、「我々大和民族にとっては、女性性器の形を音声で表現するなら、〝ぽと〟である！」「いや、我々ローマ帝国民にとっては、女性性器の形は、どう見ても〝vagina〟である！」といった争いが勃発したであろうと推測する。というのは冗談だが、実は冗談とは思えないというのが、結局、僕の考えなのだ。つまり、日本やポリネシア系民族には、女性性器をことごとく「p」の音で始めなければならない、本能的・遺伝的必然性があったはずである。その本能的・遺伝的必然性は、どこから来るかと言えば、当然ながら日本列島の

風土、ポリネシアの島々の風土から来る。台風しかり。地震しかり。そういう風土から出た人間の知覚が、「ぽと」を規定する。

ところが、それさえも飛び越えて、「人類の起源は、アフリカのある一箇所に集約される」という説が、遺伝的に証明されてしまった（ということになっている）。この上で、先の僕の考え、僕自身の共感覚体験としての実感を成り立たせようと思ったら、少なくとも、東洋人と西洋人の祖先が、現生人類発祥のあと、かなり早い時期から分かれて、全く異質の言語を作り上げていったという考えに至らざるを得ない。

さて、女性性器の呼称をひたすら調べ上げている最中に考えたことを、おおまかに述べてみたが、先日、「日本語はどこから生まれたか」（工藤進著）を読んでいたら、「遺伝的に見れば、日本人は、南アジア人よりも、ヨーロッパ系白人に近い」ことを示すであろう人類の分岐図が載っていて、この図自体に、ある程度、作為的なものを感じたが、とにかく、また考えさせられた。ただし、こういうことには、東洋人に対する西洋人学者の先入見的な意識が入り込んでいることも多いから、真偽のほどに注意して見るつもりである。親アジア人か反アジア人か、それだけで学説というのはコロッと変わるから、嫌なものだ。面白いのは、この著者自身がフランス語・フランス文学の専門家であるようで、大野晋氏の「日本語・タミル語同一起源説」を疑問視している。実は僕は、「日本語＝タミル語起源説」に、いたく感銘を受けてしまった時期があるが、結局のところ、答えは出ていないようである。とにかく、共感覚、ブーバ・キキ効果といった観点から、日本固有の文化と言葉について論じている書に、いまだ一冊も出会えていない。

やはり僕は、日本固有の「女性性器」の呼称はあったと思う。それを最初に話した頃の原日本人男性は、おそらく総共感覚者であったとも言えるはずで、「視覚上の女性性器」を「聴覚上の女性性器」に、（その当時の男性の知覚にとって）嘘偽りなく写生的に表現しようとしたとき、「ポトン」や「ポトポト」などの、いわば「音楽」を、「想像力のレベル」ではなく、「純粋知覚のレベル（視覚と聴覚との区別さえもないような共感覚）」によって感覚し、それを「女性性器」の語としたのではないかというのが、僕の思うところである。まとめれば、「ブーバ・キキ効果」が、究極的なところで普遍的に当てはまるようなオノマトペがあるにしても、それはこの「女性性器」という単語か、その他数えられるほどの単語しか見当たらないだろうというのが、僕の思うところだ。しかも、世界祖語という説をとらなくても、地理的に離れた様々な民族が、同時に女性性器の形状に「p～」の音を発想することは、十分にありうるほど、女性性器の形状は民族差がない。富士山を見たら日本の山だと分かっても、女性性器の形状だけを見て何民族のそれだと的中させる人はいない。もちろん、この部位でさえも、その形状は、民族と風土と文

化とによって異なるのであるし、ただ、これ以上は僕の力で研究することでもないし、実際に不可能だろう。

それにしても、もし本当に世界祖語が存在した、つまり、我々人類の唯一の祖先である人間の集団ないしは共同体があったとして、そこにいた数人の男性たちが、実際に女性性器の形状を目視したときに、「poto!」なり何なり、それに近い音声を発したのが、いわゆる人類の言語の発祥だとしたら、なんだか世の中の言語学者が皆、拍子抜けしそうである。

関連する過去の記事

http://ij-art-music.sblo.jp/article/6687896.html
http://ij-art-music.sblo.jp/article/6608031.html
http://ij-art-music.sblo.jp/article/6370015.html
http://ij-art-music.sblo.jp/article/6266089.html
http://ij-art-music.sblo.jp/article/6216409.html
http://ij-art-music.sblo.jp/article/5933567.html
http://ij-art-music.sblo.jp/article/5828209.html
http://ij-art-music.sblo.jp/article/5728846.html
http://ij-art-music.sblo.jp/article/5604599.html
http://ij-art-music.sblo.jp/article/5400545.html
http://ij-art-music.sblo.jp/article/5232571.html
http://ij-art-music.sblo.jp/article/5205227.html

僕の共感覚の起源を探る１　【レゴブロックの思い出から古代日本語へ】

二〇〇七年十二月十五日　起筆、擱筆、公開

僕は小さい頃、レゴブロックで遊ぶのが好きで、特に海賊シリーズには心奪われていた。もともと「作られたもの」が気に入らない性質で、最初から二隻の船の部品を合体させて巨大な一隻のオリジナル船を作るような子どもだった。そして、特徴的だったのは、人形の一体一体に名前を付けていたことだ。その名前と、海賊同士の会話に使われる言語は、日本語でも英語でも何でもない、ただ僕の体から発する音の響きによって成されるものだった。今思えば、これこそが共感覚の原点であったと思う。その言語を、二十数年経った今の僕の視点から、あえて真面目に、時には比較言語学的な方法で、再構築し、分析してみている。（そして、こういう作業自体が、ある意味では、今の僕にとってはレゴブロック的な楽しさの延長でもあるのだけれど。）

ちなみに、この海賊言語（！）の文法構造と、以前から書いているスラフォーリアの語彙とを合わせて、一つの体系を持った言語としての「スラフォーリア」と名付けることにしたい。最近、このスラフォーリアを、古代日本語や、氷河期から存在すると思われるバスク語やコーカサス諸語などと、ちょっと比較してみたところ、明らかに似ていることが分かってきた。この「スラフォーリア」「ツァラポリア」という音からして、外来語でも何でもなく、実は遠い昔の日本にあった音声の組み合わせで成立可能である。それを、僕の出身地である岡山の方言とも比較してみたい。方言でさえも、いわば「集団の言語」であるわけだから、それが個人の共感覚言語とどう似ているかを探ると、面白そうだ。

ただし、まずはなぜこのような言語の再構築が、僕という個人の力で可能なのか、読者の皆さんに驚かれないためにも、少し書いてみたい。

これを言うとびっくりされるのだが、僕は少なくとも言語（つまりは母語である日本語）を獲得する前から、物事を思考していたという確実な記憶、つまりは「自我は言語に先行する」と言える記憶がいくつもあり、（いくつかは胎児期の記憶かもしれないが）むしろ言語を得てから不可能になった感覚と思考領域があることを残念に思ってさえいる。僕が言っているのは、音波と可視光、言語と鳥の鳴き声、文字と風景の区別さえも存在しない、前言語的な「子どもの知覚」の段階のことだ。ところが、周囲の人に尋ねてみると、そもそも「モノを考える」あるいは、それ以前に「景色を見る」「音を聴く」という行為、自我の自覚そのものが、言葉を覚えて以降の出来事であって、つまりは言葉と思考とは常に連動するものであって、言葉を離れた思考など存在しないように感じられると言う。すなわち、「赤」や「red」という言葉無しにこの色を見ている（あるいは、色を聞いている、音を見ている）という共感覚がどういうものであるか、すでに空想の世界であって、体験できるとは思えないと言う。この決定的な違いは、僕の共感覚探究の最大の契機ともなっている。

いわば子どもの頃の僕は、大昔の日本人がこの日本の土地で、初めて言語を使い始めたときにやったことと全く同じことを繰り返したことになる。その意味では、子どもというのは、原始人が何十万年もかけてやったことを、個人レベルでたった数年で繰り返す。子どもの心ほど、特定の言語を離れた、無国籍で純粋な存在はない。ただし、「無国籍」とは言っても、「無民族」ではありえず、ポリネシア人は生まれたときからポリネシア人であって、完全な「民族的”根無し草”性」「故郷のなさ」はありえない。他の動物とて、日本の本州と西表（いりおもて）島とでは、ネコの体の構造が根本的に違うことは、すでにその土地の風土と気候と地形とが、そこに生まれる人間の肌の色や顔のつくりや言語をも規定していることを示している。従って、僕の目的は、先ほど書いた「言語を得てから不可能

になった感覚と思考領域」というものが、すでに日本的なものであったか、その面白みを探ることにあると言える。

失われゆくヒトの知覚と思考の領域を最小限に食い止める言語こそが、僕にとっては自分の生まれた土地から出た日本語である、というとらえ方を、僕はしている。日本の子どもへの英語教育の開始はなるべく遅いほうがよいなどといった考え方も、ここから出ていると言えばそうかもしれない。ともかく、僕は英語もフランス語もスペイン語もやったけれど、むしろ、他の言語を学んだところで、自分の子どもの頃の記憶にはブレがないという、ある意味では自分の共感覚と日本語への確信からできたことかもしれない。逆に、何ヶ国語を学んでも、満足できないとも言えるけれど。

ヒトが初めて言語を作り出したとき、古代日本語やバスク語やコーカサス諸語やイヌイット語のような膠着構造と抱合構造を持った言語を生み出したのであって、決して現代英語や現代フランス語のような屈折構造にはならなかった。僕個人に限っても、前言語的な知覚の段階からそうであったことが、今になってようやく分かる。その意味でも、ヨーロッパに現在の印欧語が侵入する前のヒトの知覚構造を今でも残している、氷河時代から存在する言語を中心として、見ていくことにしたい。人類数十万年の縮図が、個人の人生でも起こりうるということは、とても感動的だ。

僕の共感覚の起源を探る２　【数詞…日本語・北方民族言語との比較】

二〇〇七年十二月十六日　起筆、擱筆、公開

さて、「自分の共感覚の起源探りの旅（！）」の序章です。と言うよりは、僕が普段どういう方法で自分の共感覚を研究しているか、ちょっと紹介しようと思い、その一例から。

先日、共感覚言語スラフォーリアの数詞に自分で着目していて、面白いことに気付いたので、それを書いてみます。

まず、日本語の数詞を大雑把に五百年単位で載せてみました。（もっと細かくやっていますが、スペースの都合で・・・。）　そこに、僕の共感覚言語スラフォーリアをぶつけてみて、はたと気付いたのです。

私の共感覚色	言語(西暦)	スラフォーリア	上代日本語(500)	中古日本語(1000)	現代日本語(2000)			琉球語
					和語	呉音	漢音・和語混合	沖縄方言
	事実上の公用語	—	大和・奈良方言	山城方言	東京標準語			沖縄島
	母音の数	5	8	5	5	5	5	3
	0	wonon	—	—	—	rei	rei	—
	1	ʃi:	pito″	ɸito	çito	itʃi	itʃi	ti:
	2	kape	puta	ɸuta	ɸuta	ni	ni	ta:
	3	suwoŋo	mi	mi	mi	san	san	mi:
	4	jeri	jo″	jo	jo	ʃi	jon	ju:
	5	samjutsa	itu	itu	itsu	go	go	itʃi
	6	neo:ru	mu	mu	mu	roku	roku	mu:
	7	sereki	nana	nana	nana	ʃitʃi	nana	nana
	8	sijptsa	ja	ja	ja	hatʃi	hatʃi	ja:
	9	kumeruta	ko″ko″no″	kokono	kokono	ku	kju:	kukunu
	10	ʃuno:	to″wo	towo	to:	dʒu:	dʒu:	tu:

○母音の数等は、有力な説または支持する説を採用。
○子音には国際音声記号を用い、母音は乙音に「″」を付した。

音声は上代・古代日本語に似ているとも言えますが、語彙そのものが母語である日本語から影響を受けた様子はありません。前回書いたように、問題なのは、「ひとつ」や「いち」という日本語を覚える前から、自分が「数」の概念を日本語的に把握していたか否か、ということです。これを決定付けるような何かが見えてくると、面白そうです。このスラフォーリアの数詞が、いつから頭の中にあるか、幼少からなのか、もう忘れましたが、とにかく何かの教材なり遊んでいた玩具から影響を受けて「数」を覚えたと言うよりは、「数」の概念そのものに色彩を見ているという確信があり、ある程度環境の影響を受けたと思われる仮名や漢字についての共感覚とは、少し性質が異なるかもしれません。

さて、上代日本語の数詞ですが、以下のように組み替えると、倍数構造が見えてきます。これは日本語の数詞の起源として有力な説で、僕も支持しています。

数概念上の共感覚色

→	→	→	→	↓
←	←	←	←	↓

上代日本語の数詞構造（倍数法・十進法）

	1の倍数	3の倍数	4の倍数	5の倍数	素数
1倍	pito゛	mi	jo゛	itu	nana
2倍	puta	mu	ja	to゛wo	
		ko゛ko゛no゛			
一致率	◎	◎	◎	△（to゛woが、ito゛～の語頭脱落とすれば、◎か。）	―

音声上の共感覚色

スラフォーリアの数詞構造（加減法・十進法）

	1、10	2、9	3、8	4、7	5、6
1ずつ加算	ʃi:	kape	suwoŋo	jeri	samjutsa
1ずつ減算	ʃuno:	kumeruta	sijotsa	sereki	neo:ru
一致率	◎	◎	◎	○	×

音声上の共感覚色

→	→	→	→	↓
←	←	←	←	↓

アイヌ語の数詞構造（加減法・二十進法）

10=	1＋9	2＋8	3＋7	4＋6	5、10
1ずつ加算	ʃine	tu	re	ine	aʃikune
1ずつ減算	ʃinepesan	tupesan	arwan	iwan	
単語の構造	ʃineとpeとsan	tuとpeとsan	reとwan	ineとwan	wan
一致率	◎	◎	◎	◎	―

このように、綺麗な倍数構造になっているのが、日本語の数詞です。11からは「トヲアマリピトトゥ、トヲアマリプタトゥ・・・」と続くので、加算法と一桁の倍数法の混在です。倍数になっているのは一桁のみで、結局は十進法です。なぜそうなったかと考えるに、私見としては、「トヲ（十）」「モモ（百）」「ティ（千）」「ヨロドゥ（万）」が全て「たくさん」の意味であることを考えると、大きな数が必要になるたびに、単位を上へ上へと付け足していった時期が、おそらくは弥生時代と思われ、結果として整然とした十進法が確立されたというものです。ただし、「万」などは、「八百万（ヤヲヨロドゥ）」などと、象徴的な意味でしか使われず、実用的なものではありえなかったでしょう。ともかく、上代日本には「百」さえも存在しなかった時代があると思って下さい。

そこで、スラフォーリアの数詞も、日本固有の数詞のように整然と組み替えられないかと考えていたところ、5と6の間で真っ二つに折った際に、3組の語頭の子音と、1組の語中の母音とが完全に一致することに気付きました。

さらに、それぞれの数字に知覚する色を当ててみると、ペアごとに同系色であることが分かります。頭の中では幼少より数字を立体視してきたのに、この驚くべきことに、今の今まで気付かなかった自分にがっくり・・・しましたが。

しかしながら、こういった加算・減算法で数を把握している言語は、僕の知る限り、むしろ日本の北方民族の言語、または南方のオーストロネシア系の言語です。例えば、アイヌ語（二十進法）では、1～10の数詞は、図のように、驚くほど整然としています。「8」は、「あ

と2つで10になる数」と言っているわけです。ただし、アイヌ語では「5」を中心に対称となっていますので、スラフォーリアとは1ずつずれていますが、整然とした減算法型の数詞で、美しいですし、僕の共感覚に照らしても違和感がありません。

そして、僕が幼少時に共感覚によって発想していたような変則減算型の十進法が、どこの民族言語にあったかを調べたところ、はるか北の彼方、カムチャッカ半島・アリューシャン列島の先住民族アリュートル族やコリャーク族の言語の数詞体系に、僕の数把握の手法と全く同じ数詞体系がまだ生き残っているようです。これは大変に興味深い。これらの民族は、まだ民族総レベルで何らかの共感覚を持っている可能性もあります。

一般に、大きな数の勘定を必要としなかった時代の言語、つまり貨幣価値よりも物々交換による経済が主流の先住民族の言語では、少し大きな数字になっただけで単語の長大化が見られます。上代日本語で、11から上がやたらと長くなるのも、そのためと思われます。

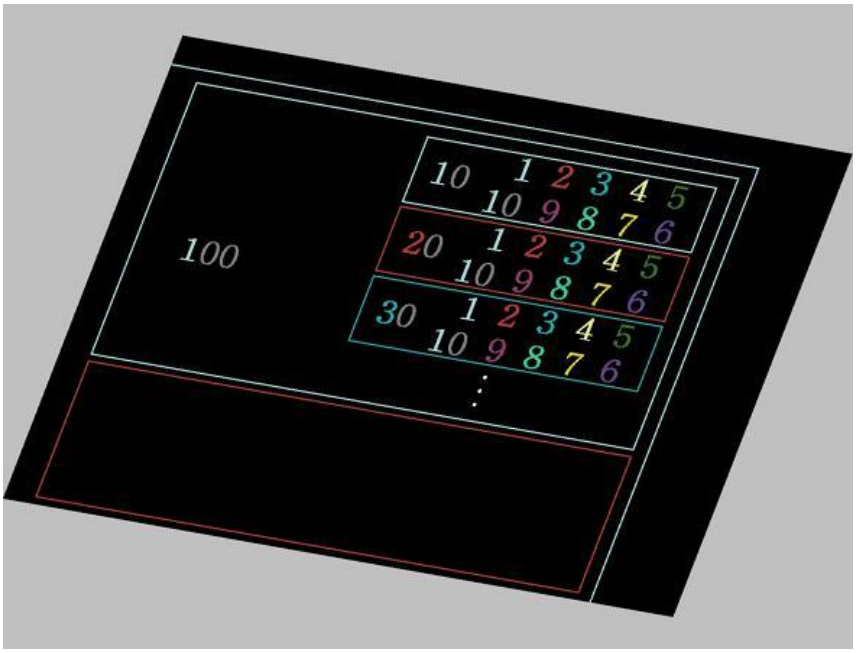
言語	スラフォーリア	アイヌ語	ニヴフ語	ウィルタ語	満州語	アリュートル語	コリャーク語
語族	共感覚言語	孤立	孤立	ツングース	ツングース	チュクチ・カムチャッカ	チュクチ・カムチャッカ
話者数		約10	不明	不明	約20	不明	4000(2002年)
0	wonon	—	—	—	—	—	—
1	shi:	shine	ńi	umu:ke	emu	nnan	innen
2	kape	tu	mi	du:	zhuwe	ngitaq	ngichcheq
3	suwonno	re	ce	ila	ilan	ngruqqa	ngiyoq
4	yeri	ine	n	ji:n	duin	ngraqqa	ngiyaq
5	samyutsa	ashikune	tho	tunda	sunzha	mllngn	millingen
6	neo:ru	iwan	ngax	nuggu	ninggun	nnanmllngn	innan-millingen
7	sereki	arwan	ngamg	nada	nadan	ngitaqmllngn	ngiyaq-millingen
8	siyotsa	tupesan	minr	jaqpu	zhakun	ngruqmllngn	ngiyoq-millingen
9	kumeruta	shinepesan	ńeńben	xuyu	uyun	ngraqmllngn	qon'aychingken
10	shuno:	wan	mxo	jo:n	zhuwan	mnghtkin	minggitken

では、倍数法で数の概念をとらえるのは、極東アジア地域では日本民族だけで、周辺民族は十進法を中心とした加減法であったかと言うと、また別のとらえ方が必要になってくると思います。アイヌ民族が、今の東北・北陸・甲信越・北部関東・鳥取・島根あたりまで

を居住範囲としていた上古日本の民族分布を考えなければならないでしょう。さらにはアイヌによって北に追いやられなかった時代のニヴフは、北海道にもいたでしょうし、ウィルタ族もオロチョン族もエヴェンキ族も、もっと南に居住して、それぞれの言語を持っていたはずです。鬼頭宏氏の「人口から読む日本の歴史」をはじめ、様々な説の平均をとると、日本語黎明期の縄文～弥生時代に、日本民族の人口は50万人規模を軸に動かなかったようです。それが、やっと500万人の民族になったところで、奈良の都が建てられた。周りには他民族が同じように存在している。言い換えれば、日本民族の血そのものが「アイヌ的」で「琉球的」であったこの時代に、数詞がいかにとらえられていたかを見るべきでしょう。そうなると、「ひとつ」「ふたつ」の元になった「ぴととぅ」「ぷたとぅ」が、純正のヤマトコトバのみで成立したものかどうかも分かりません。とは言っても、朝鮮語など周辺の言語には、この「ぴととぅ」「ぷたとぅ」の兄弟数詞が見当たりません。高句麗語・アルタイ系言語との関係を主張する説がありますが、今のところ僕の共感覚の視点からの研究を満足させるものではないようです。この日本の独特の数の勘定の仕方は、縄文語のある時期、何らかの拍子に集落を作った日本人が使っていた「数の勘定法」が広がり、やがては政治・経済の中心地となって、倍数計算の必要に迫られ、それが長い時を経て今に伝わり、世界的にも独特の数詞を得たというのが、僕の思うところです。

数詞だけは、他の基礎語彙とは違って、日本固有のものと、僕の幼少からの共感覚言語とでは、極端に似通ったところとそうでないところとが混在するというのが、結論のようです。数詞だけは、ちょっと面白い。いずれにしても、6や7以上の数字となると、もう「多い」と感覚して、新語を作ろうとせず、加算・減算法によって済ませようとする傾向が、絶滅の危機に瀕する言語で圧倒的に多く見られます。しかし、そういった言語の数詞は、共感覚的で色彩的で童心的な魅力を持っているとも言えそうです。

ちなみに、最後の表のコリャーク語以外は、下手をすると数年のうちに消滅するそうです。悲しい限りです。



→僕の数概念に対する共感覚色

僕の共感覚の起源を探る3　【日本祖語は元々、共感覚を表しきれた言語である可能性】

二〇〇七年十二月二十一日　起筆、擱筆、公開

今回は、フランス語やイタリア語を見ていて考え付いたことについて。（最近は、少々自分の思考メモのようになっていますが。）

知覚動詞・知覚に関する単語によって、共感覚の説明を試みよう。（英語でも、「see」（見る）の場合など、例えば、「I see what she means.」（彼女の言うことは分かる。）などと比喩的に使うが、今は知覚レベル・共感覚レベルでの話であるので、比喩として使われる場合をあえて除いて、知覚動詞としての機能を見ていくことにする。）

●例1●

フランス語の「感じる」という意味の動詞「sentir」は、現代日本語では、触覚を主軸と見なして「感じる」と訳されるけれども、実際は触覚だけでなく味覚についても使う。「感じる」と「味わう」の合体型としての「感じる」、と訳したほうがよいとも言える。（時に嗅覚にも転用。）　ところが、同じくラテン語の「sentire」を語源とするイタリア語の「sentire」は、基本的には聴覚において「感じる」の意味。つまり、この動詞はフランス語だと「entendre」（聞こえる・聞く）の意味に当たる知覚を中心に置いている。さらにこの「sentire」は、聴覚を主軸として、嗅覚・味覚・触覚にも使われる。英語にも「sense」の形で入ったが、日常語としてはゲルマン語源の「feel」

が圧倒的に優勢。

●例２●

「ta^ter」という動詞は、フランス語で「手探りをする」という意味、つまり「触覚」に関する言葉である。ドイツ語の「tasten」も「触覚」動詞。この二つの動詞の語源は、やはり同様の意味を持つラテン語に行き着いて、その動詞は「taxare」（手で触る）。ところが、この動詞から派生した英語の「taste」は、今やもっぱら味覚に関する語である。ここから分かることは、英語の「taste」の「味わう」の意味は、英語の歴史のどこかの時点であとから付け加わったものだということである。

	視覚	聴覚	嗅覚	味覚	触覚
フランス語			sentir（触覚優位）		
イタリア語		sentire（聴覚優位）			
ラテン語	sentire（感じる）				
英語				taste	
フランス語					tâter
ドイツ語					tasten
ラテン語					taxare

このように、同じラテン語源の動詞が、山脈一つ、海峡一つ隔てて、一方では触覚・味覚中心、他方では聴覚中心といった、知覚レベルでの大差を持つに至ったことは興味深い。こうした、いわゆる「五感」をまたがる意味を残している動詞あるいはその他の単語が、ど

の国・民族のどの言語に含まれているかに注目し、調べたところ、フランス語よりもイタリア語のほうが知覚の矮小化が見られる場合、またその逆の場合、あるいは「taste」のように、ある知覚を指す単語が全く違う知覚を指すようになった場合など、ありとあらゆる現象が、現ヨーロッパ語で見られた。複雑な歴史的・地理的・民族的要因によるものと思われるが、しかし、総じて英語よりもその他の現ヨーロッパ語、現ヨーロッパ語よりもかつてのゲルマン語・ロマンス（ラテン）語のほうが、多様な意味を元々含めて生じた言語であることがうかがえた。

英語が、世界で最も五感を合理的に分節化し、知覚の行き来を認めない言語であることは、容易に予想が付く。なぜならば、国際言語である英語においては、アメリカ人にとってもインド人にとっても、「taste」はあくまで「味わう」であって、それ以外であってはならない。ただし、英語だって、最初から今のアメリカ英語のような姿だったのではない。僕はこのことから、言語学者の鈴木孝夫氏の主張する、「日本人はアメリカ的・イギリス的発音をする必要はなく、国際英語と土着の文化的な英語とを峻別して、非欧米諸国とともに前者だけを身に付けたほうがよく、むしろ日本語を崩さぬようにすべき」との意見に同意したい。と、これは余談だけれど・・・。

いずれにしても、現ヨーロッパ語における、こういった知覚の矮小化の現象が何を意味しているかを考えてみる。むしろ、ラテン語あるいはそれ以前のヨーロッパ世界で行われていた言語が、いかに五感というものの分節化に無頓着で、または躊躇していたか、あるいは人々の知覚自体が共感覚によってなされていたために、自ら五感を峻別していないことに気付かない言語状況があったかを物語っている。

【※現ヨーロッパ語に焦点を当てた理由。】

例えば、マライ・ポリネシア（オーストロネシア）系の言語では、「聞く」と「味わう」が同じ動詞であったり、「見る」と「触る」が同じ動詞であったりする例の多様さは、現ヨーロッパの言語とは比べ物にならない。おそらくは、知覚動詞と呼ばれるものの全てが、五感的ではなく、共感覚的である。あるいは、まだ発見されていない言語が太平洋の諸島々、南米の山奥などに散在すると思われる。このように、現代の国民国家における公用語の概念が顕著なヨーロッパの言語以外では、いまだ「五感」という概念を適用することがはばかられる言語が存在する。従って、あえて現ヨーロッパ語の中に、なお残存する共感覚があるかどうかを見れば、逆にそのヨーロッパ語の民族的特徴がはっきりしてくる。

←←

さて、こういった視点を、日本語に適用してみると、どういうことが見えてくるだろうか。

●現代日本語にも「味を見る」などの表現はあるが、実のところ、これは共感覚を持たない日本人にとっては比喩表現に違いない。「味を見る」ことによって起こっている知覚現象は、「舌で味わって味覚が生じる」ことであって、「見ている」わけではない。ところが、現代フランス語で「sentir」と言う場合、本当の「味覚」と「触覚」のことを指して言うのであって、比喩ではない。この点で、現代日本語のほうが、実は「五感分節化」を引き起こした機械的言語であるように思える。

一方、江戸時代までの日本語の知覚動詞、例えば「源氏物語」期の日本語においては、ほとんどこれと逆の現象が起こる。つまり、「見る」「眺む」といった単語の一つ一つが、現ヨーロッパ語の複数の動詞を組み合わせたところの意味を持つ。換言すれば、ラテン語に対する現ヨーロッパ語の状況と同じことが、日本の古語に対する現代日本語という図式で起こっているのだが、日本語の知覚動詞一つ（例えば「匂う」）が含みうる意味の矮小化の速度が、極端に速かったことになる。

何はともあれ、まず、現代日本人でいわゆる非共感覚者である人の知覚を模式図に表すと、以下の上の図のようになる。一方、これに倣って、普段の僕の共感覚を模式的に示すとどうなるかと言うと、その下の図のようになる。この「横に滑り込んだ領域」を、共感覚を持たない日本人に対して現代日本語によって説明する際の自分の負担を、いかに軽減するかを考えたとき、現フランス語や現スペイン語を用いたほうがうまく説明できる可能性に、少々皮肉を覚えて、冷や汗を掻いてしまった。これが、冒頭に書いた「考え付いたこと」の意味なのだった。

	目	耳	鼻	舌	身
視覚	見る・視る・観る・看る など				
聴覚		聞く・聴く など			
嗅覚			匂う・香る・嗅ぐ など		
味覚				味わう など	
触覚					触る・触れる など

しかし、日本語の知覚動詞の意味の矮小化の速度が、どの時代も一律であったはずはなく、「五感」なる概念を輸入した明治期と、新生アメリカ英語を輸入した戦後に、一気に加速したというのが、今のところ僕の仮説としてある。

そこで、もともと原始印欧語やラテン語に匹敵する、あるいはそれ以上の多様な知覚のことに言及していたはずの日本語が、現ヨーロッパ語でさえかろうじて残している「匂いを sentire する」や「味を sentir する」といった言い方を、なぜしなくなったかに注目する。現代日本語では、「音を見る」や「景色を触る」とはまず言わない。言ったとしても、比喩としてということになる。結局、僕の使う「ミル」という動詞と、共感覚研究者が僕の知覚に対して説明を加えようとするときの「ミル」とは、そもそも相容れないということを常々感じる。これは、メールのやり取りのレベルでさえ、そうである。

しかし、絶望するのはまだ早くて、上の模式図で各々の知覚が別の知覚にまでまたがっている領域を含む日本語は、かつて存在したのではないだろうか。そもそも、それが「ミル」といった動詞なのではないか。現代日本語の「見る」「聞く」「匂う・嗅ぐ・香る」「味わう」「触る」は、かつての上代日本語では「ミル」「キク」「ニポプ・カング・カウォル」「アディパプ」「サパル」であった可能性が有力である。なおかつ、それぞれが「視覚」「聴覚」「嗅覚」「味覚」「触覚」を指す言葉として生じたのではなかった可能性を考えてみる。

僕は幼少から、上の模式図の、各々の知覚が別の知覚の領域に入り込んだ箇所の知覚を表すために、全く別の動詞を創作した経験を持つ。例えば、視覚の下部、すなわち聴覚～触覚が入り込んだ部分について、「フォーリス」という動詞を想定した。これはつまり、ある自然の景色に音が聞こえる、この藍色とあの紅色が重なるとどんな匂いがする、といった知覚のことを指す。こういった知覚は、現代日本語の「見る」「聞く」などでは網羅しきれない。ところが、そもそも「ミル」「キク」という日本語が、そこまでを語ったものであったなら、結局のところ、言語創作は不必要な行為ということになる。古語を習得する以前から共感覚を自覚していたために、言語創作を試みるという転倒が起こったと思われる。考えようによっては、現代日本語の動詞、周りの大人が使う日本語の動詞が、自分の知覚の広大さを表しきれないものであることを、子どもながらに潜在的に見抜いて、言語創作に至った可能性も出てくる。今は具体的にそのような記憶までは残っていないが、こういった経験をするかしないかで、その共感覚者の感じる安堵感も、教育を受けるようになったあとの時期に出てくる発想も、全く違うものになるかもしれない。

ところで、奈良・平安期の日本人は、僕と全く同じことをやっている。例えば、「ニポプ」、すなわち「ニオウ」の古語が含んできた知覚を表す中国語が存在しないことを早々に見抜いて、「匂」という和

製漢字を作った。当時の日本人の創意工夫には脱帽だ。どこからとってきたかというと、中国語の「聞く」という意味の漢字からとってきた。（こと「匂い」について、僕が詳しく書いたのが、12 月 2 日の記事ということになる。→ http://ij-art-music.sblo.jp/article/7491853.html）

このような事情を一つ一つ遡っていけば、むしろ先の僕の共感覚を示す模式図のあらゆる領域を網羅する日本語が、上代日本に存在したことが見えてくるばかりという気がする。そして、それがそもそも、「ミル」や「キク」なのではなかろうか。これは、「sentir」という動詞を、ラテン語時代のように「聞く」の意味に使いたいと思っているフランスの詩人だって、きっといるはずであるのと、同じことだと言える。

次回に続く。

（なお、五感以外にも、ヒトには平衡覚・内臓感覚などがあるが、ここでは日常語として広く用いられている「五感」を取り上げた。）

日本語についての質問

二〇〇八年十二月十八日　起筆、擱筆、公開

また長い間更新していなくて申し訳ないです。もう少ししたら落ち着きます。間があいたので、とりあえず、一つ面白いものを。

以下は、最近、共感覚者やアスペルガー症候群・自閉症の方々に尋ねて回っていて、そうでない人と比べて興味深い結果が出ている質問です。ここにも載せておきます。共感覚と自閉症との関係を調べる質問です。何も学校の国語の授業のように正解・不正解を見るものではないので、興味のある方は、お時間があるときに、お好きな箇所だけ、気楽にどうぞ。もちろん、共感覚者でなくてもかまいません。今後、質問を少し増やすかもしれませんが。

●以下の各文が自然な日本語に感じられるように、（　）に助詞（「が・の・は・で・を」など）を一文字ずつ入れて下さい。（複数回答可。「ない」という回答も可。）

ウグイス（　）鳴いています。
鳥の鳴き声では、ウグイス（　）好きです。
鳥の鳴き声では、ウグイス（　）好みます。
鳥の鳴き声では、ウグイス（　）好まれます。
鳥の鳴き声では、ウグイス（　）美しいです。

鳥の鳴き声では、ウグイス（　）美しいと思います。

風（　）扉（　）ひらく。
皆（　）扉（　）ひらく。
二人（　）扉（　）ひらく。
彼（　）扉（　）ひらく。

別れ際、雨（　）いっそう寂しさ（　）増した。
別れ際、皆（　）いっそう寂しさ（　）増した。
別れ際、二人（　）いっそう寂しさ（　）増した。
別れ際、彼（　）いっそう寂しさ（　）増した。

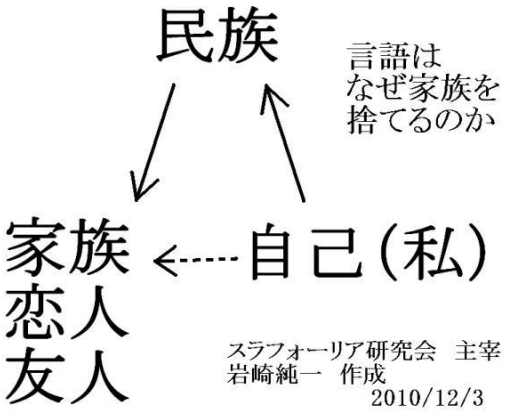
●以下の文章を読んで、自然な解釈だと思われるほうを（　）内から選んで下さい。

「昨日、彼女は髪を切ったそうですよ。」「へえ、そうなんだ。どんな髪型だろう。」は、
「（彼女・第三者）が（彼女・第三者）の髪を切った」ことを意味する文脈である。

「彼女はその物語に聞き入り、そっと目を閉じた。」は、
「（彼女・第三者）が（彼女・第三者）の目を閉じた」ことを意味する文脈である。

言語はなぜ家族を捨てるのか

二〇一〇年十二月三日　起筆
二〇一〇年十二月五日　擱筆、公開



特に具体的な活動が決まっているわけではないけれども、僕の考案言語スラフォーリア（現在の岩崎式日本語）について仰々しく「スラフォーリア研究会（現在の岩崎式日本語研究会）」を設けた。

「自分（日本人）はなぜ、家族や友人と会話するにも、いったんは家族や友人を捨てて迂回し、日本民族の日本語という言語へと大回りしなければならないのか」

この悩みは、僕が中学二年生の頃から持っていた悩みのうちの一つだった。

世の中には、いわゆる「家族ルール」というものがある。「ウチでは皆、トイレの扉を開けっぱなしで用を足す」、「我が家では車には土足で乗らない」、「家族それぞれがマイ風呂桶を持っている」など、色々と個性的なものを耳にする。

しかし、もし本当に「家族（family）」が社会と文化の最小単位であるなら、「日本語」ではなく「家族語」が存在してもよかったはずである。

あるA家の中では、「扉を開けっぱなしで用を足す」を意味する動詞「ぱなしぽさらす」があってもよいはずだし、B家には「車には土足で乗らない」を意味する否定動詞「どさらばさらない」があってもよいはずである。あるいは、「ウチでは動詞の活用をしない」などという独自の文法が成立しそうなものである。

だが、そうはならない。わざわざ家族の「外部」の言語「日本語」を用いて「扉を開けっぱなしで～」などとややこしく言う。

我々は、身近な家族と話すにも、一旦は「家族」なる概念を横に置いて、むしろ「日本民族」なる概念を確定的に実在するものと仮定し、その民族が用いる「日本語」へと大回りして再び家族を認識している。なぜか例外なく、そうである。

「家族と心が通じる」ということの真相は「家族の母語が認識できる」ということである。もし本当に「心が完全に通じ合えている」と断言できる理想的な家族がいるなら、そこに「日本語」は必要ないことになる。

つまり、我々日本人が「家族」と言うとき、それは結局、「日本語で互いに認識し合う家族像の幻影」という意味のことであると言える。

「日本」「日本人」「日本民族」「日本文化」といった概念と、純粋な「家族」という概念とは、本来は相容れない。

もちろん、ここで言う「家族」とは英語的「family」、「民族」とは英語的「race」、「言語」とは英語的「language」のことだ。戦前・戦中日本のように天皇を「現人神」と見なしたり、太古日本のようにムラの長を「父」と見なしたりし、日本民族それ自体が「共同体としての家族」であるという見方をすれば、日本ほど「言語」と「家族」とが高精度でほぼ一致している国は無い。

或る言語が共有される物理的・精神的領域というものは、必ず、一つの例外もなく、「家族」や「恋人」や「友人」といった最小のゲマインシャフト（※注1）を捨て、「民族（race）」という中途半端な共同体を選択して、なおかつそこにとどまろうとする。逆に、どんなに一つの言語（英語）が世界に普及しようが、全人類が地球規模でそれを母語とするところまではいかないのである。「言語」は必ず、自然の摂理として、「民族」を選択するのである。

もちろん、日本においては、まだ江戸時代にもアイヌ・蝦夷（エ

ミシ）・隼人（ハヤト）・熊襲（クマソ）などの少数民族が本州の至るところにいて、それぞれに言語があった。だから、今僕が言っている「日本語」とは、「天皇」の支配の及ぶ領域の母語としての「日本語」である。もし天皇の存在がなかったなら、日本語の規模と分布は全く違っていたわけである。

つまり、僕の冒頭の問いは、「なぜ僕は、家族や友人としゃべるにも、一度は天皇と同じ言語と世界認識を志向するのか」という問いと同じであることになる。「なぜ自分は、自分の父親と話すにも、いったんは天皇を中心とする日本語の認識世界へと迂回してから父親を認識するのか」という問いのことである。

日本人、特に男性ならば、この事実（自分の父親と天皇とが同じ言葉を母語として生きる事実）と人生で一度は真剣に向き合うべきだと思う。このことを喜ぶか苦しむかは別にして。そして、やはり日本人は、英語よりも日本語の良さに立ち返ってくるのがよいとも思う。

この事実を言語学的に破棄して、自分の母語である日本語を否定し、自己意識の外部に無言語的に実在するものとしての「父親」とか「大自然」とか「好きな女性」を完全に認識するということは、日本人には不可能なのだと言える。あるいは、それができないことが日本人の特質であるとも言えると思う。

「日本国」と「日本民族の居住領域」とがだいたい一致しているがために、我々日本人自身には分かりにくいが、「言語」が「国家」「国境」ではなく「民族」なる境界をおのずから選択していることは、イスラエル人やクルド人や朝鮮人を見れば簡単に分かることだ。国を持たずとも、民族がいるところには生き生きとした言語があるのだ。

ところが、その言語を操る我々人間にしてみれば、「家族」や「恋人」や「友人」といった小規模の共同体のほうが定義しやすく、かつ安心感の基本単位なのであって、「民族」なる概念のほうが混血その他の理由によって不安定なもののはずである。

しかし、そういった「家族」についての定義や安心感のほうが、どうやら極めて近代的な思考様式であって、人間の脳は、本来は「民族」なる概念のほうに安住するようにできているらしい。ということは、「民族」全体をいわばゲマインシャフト的な「家族」と考えていた戦前の日本は、あえて軍国主義をやったというよりは、その思考様式が極めて生物学的・生態学的に見て自然であったがために戦争を避けられなかったとも考えられる。

しかし、特に現代社会では、「人間」と「言語」とは、分離した別個の主体概念であり、「言語」それ自体が「人間」の意志と同等の仮想意志を持ってふるまっている。だが、この「人間」と「言語」の分離独立に気づいている日本人は、本当に少ないと思う。

僕の勝手な意見であるが、「日本人」とは「日本語を第一言語・母語・人生の基盤語として話す人間」のことである。逆に言えば、「自国の小学生に強圧的に英語を学ばせることを良しとするような日本人」は「日本人ではない」と僕は信ずる。

そして今や、たとえ「民族」よりは近代的な概念であるけれども

安住できる場所の筆頭であるはずの「家族」という概念さえ、虐待問題などで崩れかかっている。

※注１：ゲマインシャフト（共同体）・・・

血縁・地縁・恋愛・友情などによって自然に結び付いた伝統的共同体。家族・親族・恋人・友人・町内会など。多くの場合、或る一つの言語を母語として共有し、なおかつその言語の行われる範囲よりも小規模である。利害関係をもとに人為的に形成された会社（営利社団法人）・地方自治体・近代国家・超国家型同盟（国連・NATOなど）といったゲゼルシャフト（利益社会）に対する概念。ドイツの社会学者テンニースらが提唱。

共和制・大統領制国家は間違いなくゲゼルシャフトであるが、立憲君主制国家の一部はゲマインシャフトである。日本は、事実上の元首として天皇を戴いており、特に戦前では巨大なゲマインシャフトを形成していたとも言える。日本語は、憲法にも国語・公用語として記載されていないからこそ、現在でもゲマインシャフト的な言語と言える。

新常用漢字

二〇一〇年十二月十日　起筆、擱筆、公開

（二〇一八年七月十五日追記：現在、リンク先の岩崎の旧サイトの内容は『全集』に掲載。

今年の六月に文化審議会国語分科会から文部科学大臣に答申され、先月三十日に告示された新常用漢字表。僕が以下に載せている２９６５字は、日本工業規格の第一水準漢字で、常用漢字・新常用漢字を含む別規格だが、いずれにせよ僕は、今回の新常用漢字も全て共感覚色で記憶している。

http://iwasakijunichi.net/ronbun_ippan/kanji1-1.pdf
http://iwasakijunichi.net/ronbun_ippan/kanji1-2.pdf

今回新たに追加された１９６字は、「柿」「亀」「誰」「脇」など、すでに多くの国民が用いている字で、それほど難解な字はない。「書けるかどうかは分からないが、ほとんどが読める」という国民が圧倒的多数と思われる。

（常用漢字に追加された１９６字）
http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/topic/joyo2010/list.html

削除されたのは「勺」「錘」「銑」「脹」「匁」の５字。「勺」と「匁」は度量衡の単位。「錘」は、「紡錘」くらいしか使わなくなった。「銑」

は、もはや日本史マニア以外は知らなくても困らないような漢字（陸軍大将・第三十三代 内閣総理大臣　林銑十郎）。「膨脹」も、今は「膨張」と書くのが普通。一方、「逓信（ていしん）」の「逓」は残ることになった。

たった一つ、読みが変更された漢字があって、それは「側」。「かわ」が「がわ」になった。「かわ」と読むのは、「右っ側」「上っ側」など促音「っ」を伴うときぐらいだ。例えば、「面」は、単独では「づら」よりも「つら」と読むことが多いのに、「側」は単独でも「がわ」と読むようになった。明治・大正時代は「かわ」と読んでいた。今そのように読む人は、普段観察する限りでも、ほぼ全て九十歳以上の人である。

二〇〇八年に亡くなった国語学者の大野晋氏は、「日本語の起源はタミル語である！」と奇説を唱えながらも、廃れゆく「日本語の良さ」については鋭い洞察を持ち、「なぜ漢字が工業規格なんだ。文化規格にすべきだ」と言った。今後も、そのような優れた国語学者が出てこないものだろうか。

昔は、前近代的で突拍子もない新説・奇説を持った国語学者は多かったが、日本語を愛する心は今よりもずっと大きかった。

（文化庁　「常用漢字表の内閣告示等について」）
http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naikaku/kanji/

★訂正★

「漢字は工業規格ではなく、文化規格であるべきだ」と言ったのは、大野晋氏ではなく、情報工学者の坂村健氏でした。失礼しました。もしかすると、大野氏も言ったかもしれません。いずれにせよ、氏たちの論は正論だと思います。